

# 礼文島環境フォーラム 2010

## 実施報告書



イラスト 藤間裕子

2010年9月11日、12日実施

主催：環境NPO 礼文島自然情報センター

2010年のフォーラムは「自然歩道の未来」というテーマで開催しました。礼文における自然歩道の現状や周辺の自然環境の変化を見据え、持続可能な利用を参加者と共に考えて、礼文島に合う自然と観光が共生できる歩道管理のあり方を探ることを目的に開催しました。

## 1. 開催日時および場所

●平成22年9月11日（土）

午前の部 トレッキング

8:15～12:00 礼文林道～268 ピークコース（仮称）～富士見スキー場

午後の部 フォーラム 13:15～17:00 礼文町民活動センターピスカ 21/1階／大ホール

●平成22年9月12日（日）

自然観察と外来植物除去 9:30～11:30 桃岩展望台周辺

## 2. 協力団体

共催

環境省稚内自然保護官事務所 林野庁宗谷森林管理署 礼文町役場 レブンクル自然館  
利尻礼文サロベツ国立公園パークボランティアの会 礼文島自然クラブ  
北海道大学大学院農学研究院・大学院農学院・農学部

後援

北海道宗谷総合振興局 礼文町教育委員会

## 3. 広報

回覧版、チラシの配布、防災無線、北海道新聞、ホームページ、メーリングリストなど。

## 4. 実施内容

(1)平成22年9月11日（土） 礼文島環境フォーラム2010

### ①モデルコーストレッキング（午前の部）

自然ガイド各2名、歩道解説者2名

参加者26名 徒歩距離約5km

8:40 フェリーターミナルよりバス乗車、礼文林道元地口下車以降徒歩にて歩道の現状と自然観察をしながら富士見スキー場まで散策。



モデルコーストレッキング参加者



モデルコースの解説を聞く参加者

## ②フォーラム（午後の部）

参加者 54 名（スタッフも含む）



### プログラム1 <講演>

「世界遺産や国立公園に指定されると何かが変わるのか？

-屋久島、八幡平の観光利用、歩道管理の現状から-

岩手大学農学部准教授 柴崎茂光氏

※講演概要は資料1参照。以下はまとめです。



地域の保全活動を考える際、守りたい資源は何なのか、守りたい資源の価値とは何なのか、どこまでの開発が許され、どこまでは許されないかなどを議論しないとはいけません。ただある

特定の場所だけきびしく規制をかければ、他の場所に問題が出てくるのが想定されるため、計画的かつ包括的に守っていかなくてはなりません。

礼文島の自然環境を保全するには、住民の生活なども含めすべてを守ることが必要です。そのためには環境省、林野庁、礼文町など様々な団体や地元住民も参加することを前提にした計画作りが不可欠だと考えられます。

### プログラム2 <発表>

「礼文の自然を考える」礼文高校3年生

全校生徒40人3年生19人の中から代表して2名が高山植物をテーマにした授業について紹介してくれました。発表の概要は以下の通りです。



高山植物の授業の目的は、1) 自然に関する基本的な事項を理解する。2) 観察・実験・実習を通して、自ら考える力、探究する力を身につける。3) 自然に対する興味・関心を持ち、自主的に自然と関わってゆく姿勢を身につけることが挙げられます。授業の特徴として、専門家が講師となった四季の野外授業があり、自然観察を通して礼文島特有の植物の生態、その場の環境を肌で感じることができます。

具体的には、島の環境については植物分布図などを使っての高山植物の解説。積雪断面の観察と温度測定による積雪の保温効果などを理解。礼文の代表的な花であるレブンアツモリソウ、レブンウスユキソウ、レブンコザクラなどの生態観察です。また、礼文の自然環境を考えるためグループごとにテーマを考え詳しく調べる授業も実施しました。例として、海岸ゴミをテーマにしたグループでは、海岸のクリーン作戦の際に漂着ごみの量やどこの国のものがあるかなど調べました。

これらの授業を通して、自分達が暮している島のことをよく知り、今ある自然をどの様に守ればいいのかを考え行動し、この美しい自然を残したいと思います。

### プログラム3<報告>

「環境・施設・管理からみた礼文島歩道の現状」  
北海道大学大学院農学院 修士2年 熊谷怜奈氏  
発表の概要は以下の通りです。



今回の報告は、1) 礼文島の自然歩道について 2) 2009～2010年に行った調査について 3) 未来の礼文島自然歩道についてです。

#### 1) 礼文島の自然歩道について

年間約16万人の観光客が高山植物や景色を観るために訪れる礼文島で、現在観光に利用されている8コースをピックアップして現況調査を実施しました。礼文島の自然歩道の状況は、

- a. 観光や散策を目的に利用されている環境や難易度の様々な自然歩道が存在。
- b. 多くは国立公園、国有林を通っている。
- c. 一部礼文町の土地や私有地が含まれる等、管理形態が複雑。

以上の特徴がみられ、各歩道の利用方針が定まっていない様です。

また各歩道について自然環境への影響に対する懸念があります。例えば踏み込みによる裸地化。バイクによる土壌侵食。ぬかるみによる植生への踏みつけ等が見られる部分がみられました。現在、自然歩道の特性や利用状況が明らかにされていない様です。

上記のことから

- ①ROS\*を用いて礼文島自然歩道の現状を把握する。
- ②意識調査を行い、利用者の実態を明らかにする。
- ①②の情報から「礼文島の自然歩道を今後どのように利用していくべきか」解析しました。

※ROSとは「Recreation Opportunity Spectrum」の略です。1978年に米国で開発された野外レクリエーション地における計画管理手法で、利用者のニーズや資源の保全を考慮し、利便性の高い空間から原始的な空間といったゾーニングをおこないます。ゾーンごとに明確な管理計画を示すことが出来るのが特徴です。

#### 2) 2009～2010年に行った調査について

2009年に実施したROSの目的は礼文島自然歩道の特徴や問題点の把握です。環境、施設、管理の項目について細かく段階をつけて評価しました。

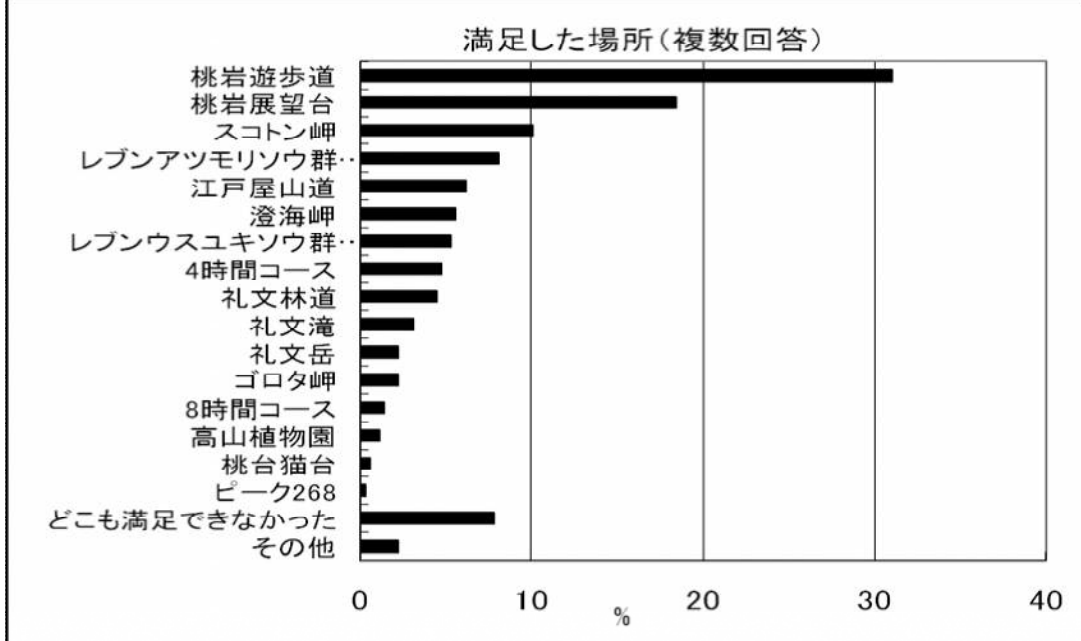
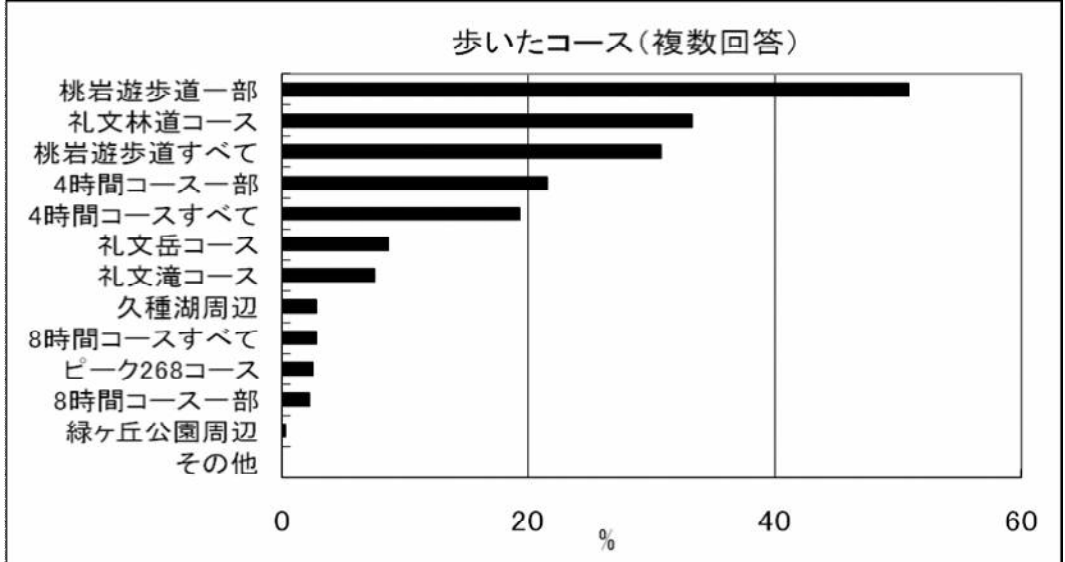
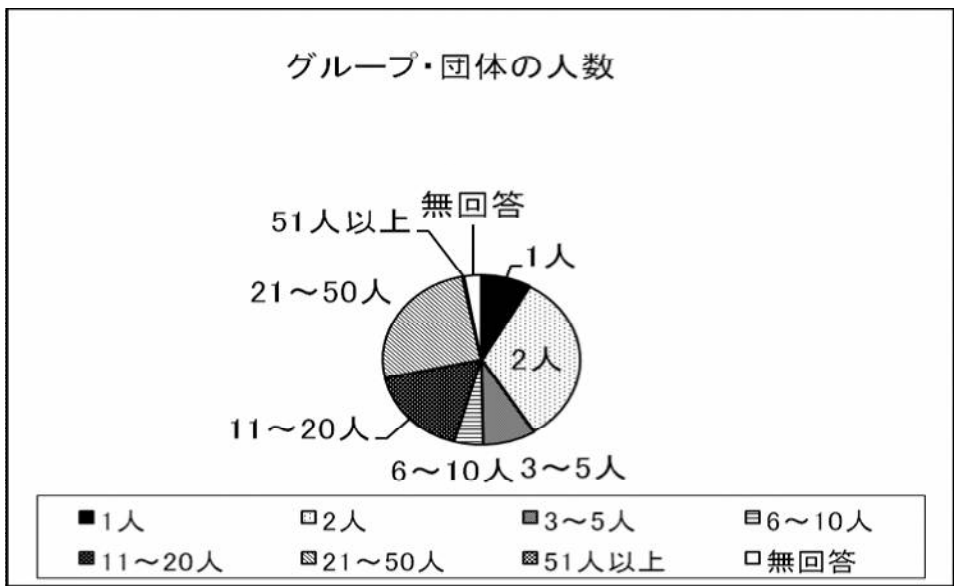
調査データをまとめたところ、対象にした歩道の中で、雨が多かったことがありぬかるみによる複線化がみられ、国立公園特別保護地区にも過剰と思える整備がみられました。また一部の整備部分に破損がみられそれが放置されている状況がありました。

2010年には礼文の歩道を利用した観光客を対象に意識調査を実施しました。方法はフェリーターミナルにて帰りの観光客を待ちアンケートに答えてもらいました。期間は6月と7月で合計769人に回答を頂き、内訳は女性54%、男性51%、そのうち道外在住者が88.5%です。返信用のアンケートを別途619通配布していて、回収率は67.5%になりました。

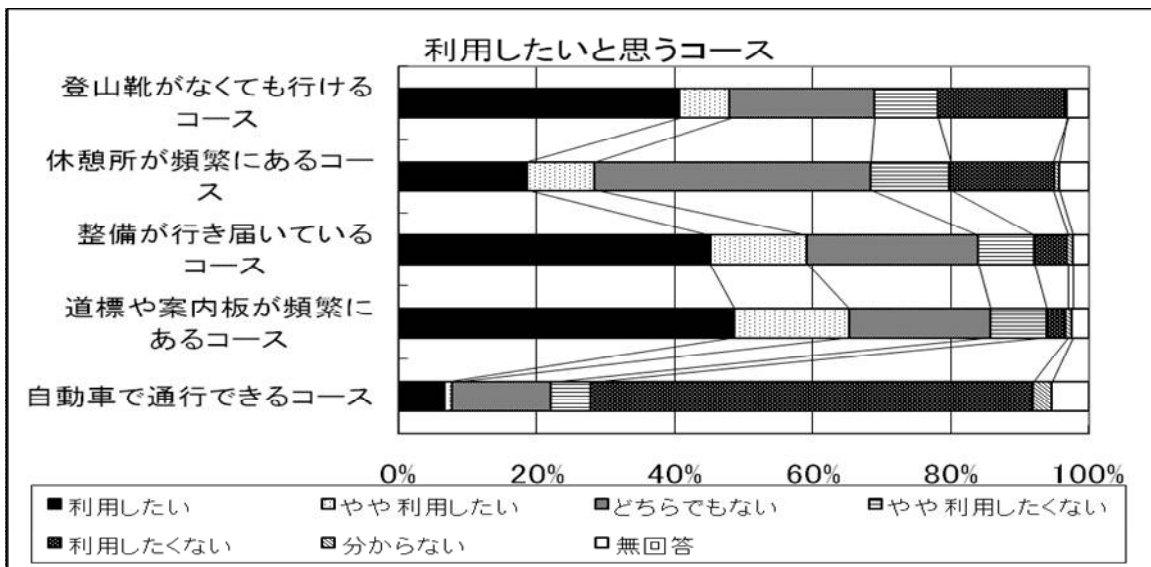
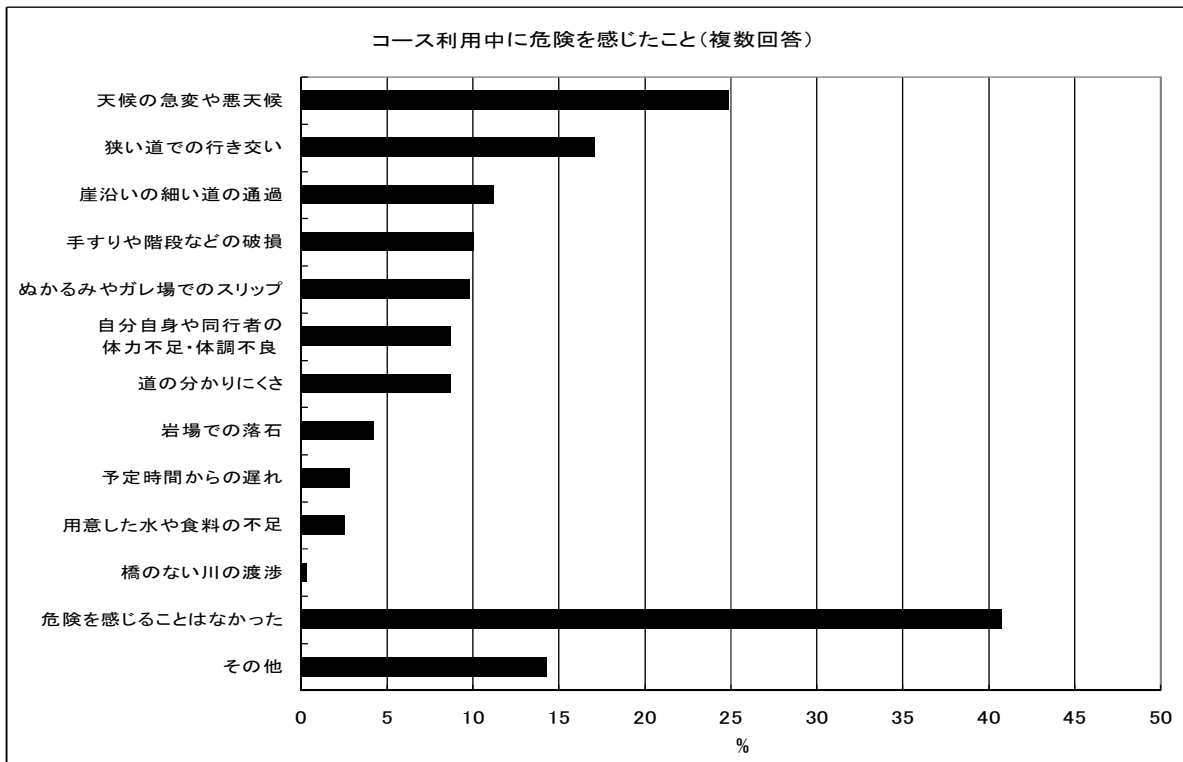
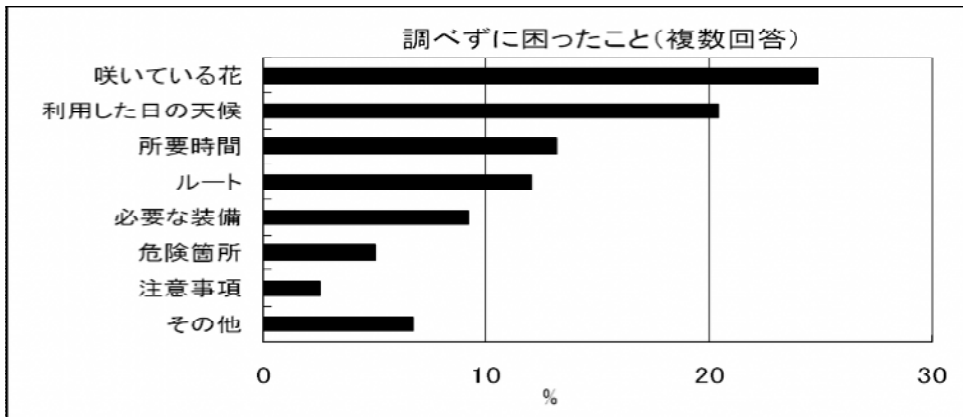
アンケートの内容は、来島の目的、個人または団体、どこのコースを利用したか、利用したコースに関する質問などについてでした。

※アンケートの集計は2011年に資料を頂きました。その中から抜粋して以下に掲載しました。

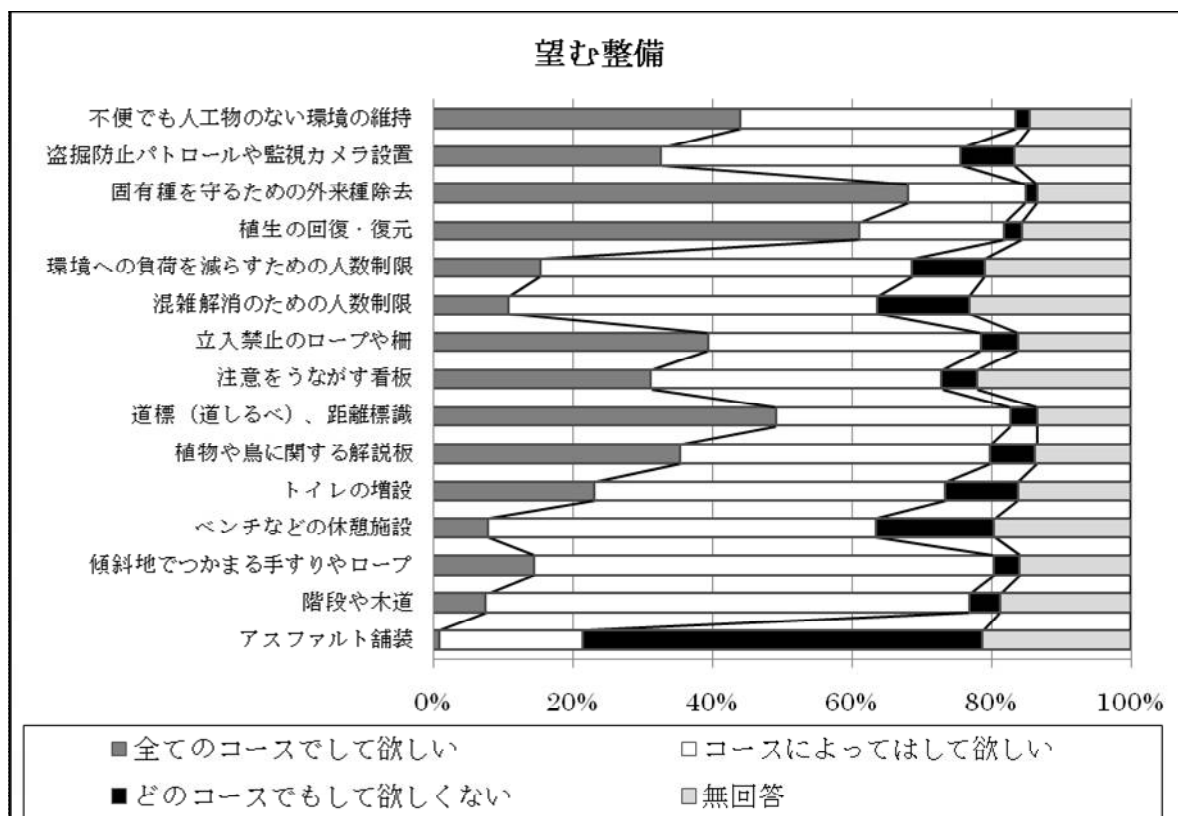
アンケート結果1



アンケート結果2



### アンケート結果3



ROSやアンケート調査の結果から分かったことは、

- ①自然度が高い場所の整備により軽装で利用する人がみられた。
- ②道標が不十分で、またはあっても見つけづらく道がわかりづらい部分があった。
- ③利用者が多いところで整備部に破損がみられる

など、整備と利用がかみあっていないところがみられたことです。

### 3) 未来の自然歩道について

礼文島としてそれぞれの自然歩道をどの様に利用していくべきでしょうか？

利用状況について位置づけが変わると思いますが、例えば礼文滝コースであれば、誰でも簡単に歩ける場所ではない様にみえました。桃岩コースでは、利用者が多いのもっとしっかりした整備をしても良いのではと感じました。

今後はそれぞれのコースの位置づけを明確にし、どのような整備・対策をするべきか考える必要があるのではないかと考えられました。



268 ピークコース（仮称）にて



月の丘コース（仮称）にて

## プログラム4<ワークショップ>

テーマ「礼文島の自然歩道の未来図を作ろう」

進行役 北海道大学農学院環境資源学

准教授 愛甲哲也氏

参加者に5～6名の6グループに分かれ、それぞれのグループにリーダー、サブリーダーを配置しました。そしてグループごとにモデルコースの現状について感じたことを地図に書き込み、それらに対するの整備や対策を考え、各班それぞれの結果を発表しました。



ワークショップ 各班発表



ワークショップ風景

(2) 平成22年9月12日(日)  
秋の草原の自然観察と外来植物除去  
参加者30名(スタッフ含む)

参加者を5班に分け、各班に除去作業の指導者を配置し、桃岩展望台周辺で観られる花を楽しんだ後、1時間ほど歩道沿いのムラサキツメクサやシロツメクサなどの外来植物除去作業を実施しました。除去した外来植物は4502袋分になりました。



除去作業後の記念撮影

## 5. まとめ



フォーラム風景

柴崎氏の講演では、世界遺産に登録された屋久島と、礼文島と同じく国立公園に指定されている八幡平の現状や利用者の増加に伴って発生した様々な問題をピックアップし、今後の礼文島における観光のあり方について検討すべき課題が投げかけられました。

礼文高校の発表については、まず教育機関の参加は初めてであり、発表のテーマも「礼文島の自然を考える」との内容で学生達が地域の自然に関心をもってくれたのはとても喜ばしいことです。授業の中で高山植物をテーマにし、内容にも工夫を凝らして取り組んでいる様子を知ることが出来ました。今後のフォーラムにおいても、子供達の目線で礼文の自然の見方を発表する機会があることを期待したいと思います。

熊谷氏からの報告は、礼文島の自然歩道において、初めて ROS の手法を使った現状評価でした。礼文島の自然歩道を客観的に評価することで、現状において、利用の状況と整備が見合っていないことがわかりました。そして今後それぞれの自然歩道の位置づけを明確にして、整備水準の設定を検討すべきとの課題が挙がりました。

ワークショップでは、参加者からモデルコースについて現状や今後の整備・対策に関する多くの意見や感想を出し合うことができました。現状についての意見は、標識に関する事、礼文林道の車両通行に関して、月の丘コース（仮称）の整備状況に関するものが比較的多く、今回利用したモデルコースについて、香深港から散策する際に半日ほどで一周出来るコースとして利用しやすいとの意見が多数ありました。

整備・対策についても、今後どの様に対応した方が良いか意見を述べてもらいました。車両について出されたのは、歩行者優先の視点で、礼文林道の車道としての利用を規制した方が良いとの意見が多くみられたが、障害者なら車でウスユキソウ群生地入っても良いのではないかという意見もありました。また、車の利用を規制するには駐車場の整備が必要との意見や、フェリーターミナルからシャトルバスを出し、その他の車は規制する方が良いとの意見もありました。標識については、全体的に表示が不十分と考えられ、距離、所要時間、危険箇所、利用者のレベルや装備、悪天候時の利用制限、利用人数の制限などの内容が書かれたものが必要との意見がありました。月の丘コースに関しては保護的な視点、利用者優先の視点などで多様な意見が出され、このコースに関しては利用目的や管理方針を明確にする事が特に必要と考えられます。268 ピークコース（仮称）を現状のまま利用する場合はPR や規制を特にしない方が良いとの意見が多く、また PR して利用するのであればコース名の変更、利用者の制限や標識の設置、柵の設置などが必要との意見もありました。



グループごとに議論する参加者

今回のワークショップでは簡単なアンケートにより、歩道の保護と利用に関して指向の異なる6班に分かれて議論を試みました。そこで多様な意見や感想を得ましたが、内容が重なる意見も多かったことから、これらをさらに多角的に検討することでモデルコースの今後の理想的な利用方法が見えてくるのではないかと

考えられます。また、多くの意見の中に「PRの程度で管理方法が異なる」、「管理体制や利用方針がはっきりしていない」との意見がありました。

それはモデルコースの中で林野庁、礼文町といった管理者が異なる区間があったからです。それぞれが管理する歩道で目的や考え方が違うので整備や施設の度合いが違うのは当然でした。そういった事を知らないまま意見を出し合っても、視点の違う意見が山ほど出てしまい方向性がまとまらないことがわかりました。



参加者の意見・感想を貼ったワークシート



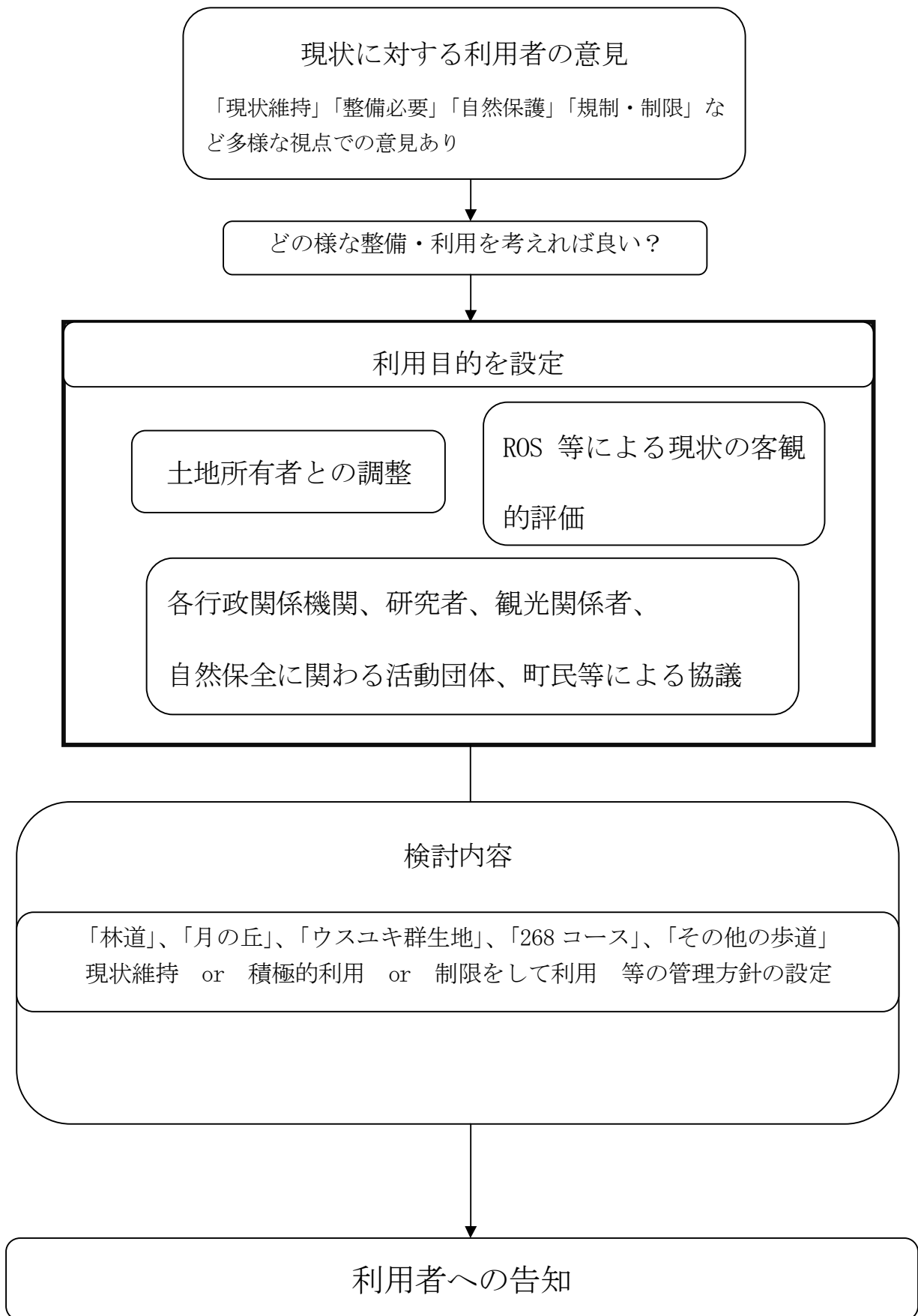
ゴロタ山から見た景色（4時間コース）

今回のフォーラムを通じて、“利用方針”を決めるためには何が必要なのか考えてみました。まずは実際に歩道を歩いて利用者の目線、または客観的な目線で現状を観察し、現状を調べてみる必要があると思います。そして“利用方針”に関しては歩道の管理者との調整も必要になります。各歩道の現状を基にそれぞれの利用方針を“積極的利用”<sup>※1</sup>、“現状維持”<sup>※2</sup>、“規制や制限して利用”<sup>※3</sup>などに設定し、“標識の統一”、“散策レベルの設定”、“利用人数”、“整備度合・優先度”などの具体的な内容をピックアップし、歩道の維持・管理に関わる各行政関係機関や研究者、観光関係団体、自然に関わる活動団体、町民が参加して協議するのが良いと考えました。これらの事を行うには時間と労力がかかります。すばらしい植生と景観を持つ礼文の歩道が将来的にも魅力的であるよう、段階的に話し合い実行出来るように皆様方と協力して進められればと思います。最後に、以上の内容を模式図にまとめましたので参考にして下さい。

※1 積極的利用：施設や整備などを充実させてより多くの人に利用してもらう。

※2 現状維持：今までと同じ程度の利用を考え、整備等は順次おこなう。

※3 規制や制限して利用：歩道の状況により、人数、装備、天候、期間などなんらかの規制・制限を設け過剰な利用を避ける。



自然歩道管理の考え方の一例

## 世界遺産や国立公園に指定されると何かが変わるのか？

### - 屋久島、八幡平の観光利用、歩道管理の現状から -

柴崎茂光（岩手大学農学部）

#### 1. 屋久島の状況

屋久島（鹿児島県屋久島町）は、九州の最南端である佐多岬から約60km西南に位置する（面積50,486ha）。中心部には、標高1,936mの宮之浦岳を筆頭とする奥岳が広がる。標高1,000m前後の地帯には、樹齢1,000年を超えるヤクスギが生育し、縄文杉、ヤクスギランド、白谷雲水峡などの観光地が存在する。1993年12月には、傑出した景観や生態系のプロセスが評価され、山岳地域の10,747haが世界自然遺産に登録された。遺産地域の95%は林野庁が所管する国有地であるが、遺産地域・周縁部の管理は、林野庁、環境省、鹿児島県、屋久島町、屋久島世界遺産地域連絡会議など多様な主体が関与している。



宮之浦岳山頂からの風景

1980年代終わりまで、10万人前後で推移していた屋久島への入込客数は、1989年の高速船就航や1993年の世界遺産登録を契機に増加しはじめ、2007年には39.5万人に達した。増加する訪問者を受け入れるべく、環境省の補助金事業を活用した鹿児島県による登山道整備、林野庁の直轄事業による縄文杉デッキの建設などが、世界遺産登録直後から積極的に進められた。近年に入っても、山岳地域のトイレ整備、環境省による携帯トイレブースの設置も進み、利用者の利便性はさらに向上した。その一方で、山岳地域における維持管理費用の増大、管理体系の複雑化、違法刈り払い問題といった様々な問題が派生的に生じており、1980年代終わり頃から議論されてきた山岳地域の過剰利用の問題は、一向に解決の兆しを見せていない。こうした管理の状況に対し、約6割の島民が不満を抱いている。

#### 2. 八幡平地区の状況

十和田・八幡平国立公園八幡平地域（面積40,491ha、1956年に編入）は、岩手県と秋田県の県境に位置し、秋田駒ヶ岳を中心とする南八幡平地区、岩手山地区、八幡平地区から構成される。八幡平頂上周辺は、ほぼ平坦な高原で、周辺に八幡沼や湿原、温泉などの観光資源が広がるため、1968年に特別保護地区に指定された。主な登山道として、茶臼岳 - 黒谷地 - 八幡沼コース、焼山コース、裏岩手縦走路などがある。また、景観をより多くの人に提供するために、アスピーテライン、樹海ラインと呼ばれる2つの車道が頂上付近を通っている。

ROS (Recreation Opportunity Spectrum)の視点から登山道を評価した結果、公園指定時は、大半の登山道は原生的であったが、アスピーテラインの開通を前後に、八幡沼を中心に木道整備が進み、利用者が増加した。その後、荒廃が進み、更なる荒廃を防ぐための整備がなされ、道路沿いを中心に都市的な空間に変化し、不整合と呼ばれる状況が発生してきていることがわかった。



八幡平・源太森から見た  
風景

### 3. まとめ

いずれの地域においても、指定後に道路・登山道、トイレ整備といった施設整備が進んだ。これら開発行為は、訪問者の利便性を向上させた一方で、本来持っていた景観や生態系に、不可逆的な影響を引き起こしてきた。今後は、多人数の利用に適した観光地づくりだけでなく、様々な利用者を満足させる仕組みづくりが必要といえる。

#### 参考文献

- SHIBASAKI, Shigemitsu (2010) Verifying governance system of world heritage areas from an aspect of common-pool resources –A case of Yakushima Island, Japan-. *International Forestry Review* 12(5): 202.
- 柴崎茂光(2008) 世界遺産登録は有効な地域振興策か? -鹿児島県屋久島を事例として-. *国立公園* 666:19-22.
- 柴崎茂光・佐藤武志・八巻一成(2007) 多様なレクリエーション機会の提供という視点から見た自然公園管理の現状-十和田八幡平国立公園八幡平地区を対象として-. *日本森林学会大会発表データベース* 119: 252.

#### 講師 プロフィール

柴崎茂光 (しばさきしげみつ)

岩手大学農学部 地域経済・観光学研究室 准教授

1972年埼玉県生まれ。

東京大学大学院農学生命科学研究科助手(2002～2005)

を経て、2006年より岩手大学農学部に赴任し、現在に至る。

専攻は、地域経済・観光学研究室。

屋久島・八幡平を主な対象として、保護地域の

持続的な管理枠組みの構築にむけた研究を行ってきた。

資料-2 ワークショップで出された意見・感想 班別一覧

	今後の望ましい位置づけ	礼文林道	月の丘	268コース
A班	利用方針	①	①～②	②
	整備	トイレを自然に配慮した立派なものに 林道入口に駐車場の案内板 ウスユキ群生地や滝の詳細な看板	現状維持の柵	転倒防止のロープ(ガレ場) 距離・所要時間の道標
	対策	コースマップを持ち歩く ウルシの注意	大雨・強風時に規制 元地側から一方通行	
現状	トイレが使いにくい整備が必要 群生地から先の案内板が無い 森林を抜ければ見晴らしが良くなるのがい 砂利道を長時間歩くのはつらい 歩きやすい 雨の日でも歩きやすい 駐車場の案内が欲しい 案内標識が少なく不親切	道が細く恐かった 景色が良い 花が見られるのは良いが道が悪く歩くのが 急勾配の坂があり雨の際に滑りそう	出入り口だけにしか標識が無いのは不親切 利用が少ないので歩道上に花が見られる 適した装備の人だけ通し、一般化すると荒れそう ピーク付近は滑りやすく危険だが景色が良い ピーク付近はロープを越えて踏み荒らされそう	
B班	利用方針	正しい利用	正しい利用	正しい利用
	整備	看板のデザインを統一 募金トイレの設置 入口に簡易トイレ	足場の整備 簡易的な整備しやすい柵にする 登り口は鉄の杭にする 10年ごとに規制して植生を回復させる	自然のままの歩道が良い
	対策	観光車両の通行禁止 車両規制		看板は不要、地図を持って歩く 宿から詳細なコース説明が必要
現状	車が入っていて良くない 読めない看板がある 初級者向けのコース 歩行者と車の事故が心配 トイレが渋滞する トイレは現状でよい	足場が悪い 木柵が傷んでる	トイレがない スキー場からの稜線が分からない ピークからの景色が良い	
C班	利用方針	①	①	①
	整備	分岐点・入口に距離や時間、散策レベル の目安が書かれた看板の設置	がっしりとしたロープ柵 近自然工法などを使った道を守るための階 段の設置	距離表示の看板 簡易的なロープ柵の設置 スキー場内に花が見られるルート等の整備
	対策	団体での利用が可能 車両利用のルール作り		子供連れで楽しめるコース作り 小グループ以下の利用
現状	ウスユキ群生地の歩道の崩れが気になる 利用状況は今が限度 車利用について検討が必要	ロープや杭が傷んでるが点検がされている のか 草が道を覆い少し怖い 石などあり滑りやすく歩きにくい 道が狭いのですれ違いが難しい 入口の情報が少ない 登った人はみんな喜んでる	標識があるがロープがあるので利用していいの かわかりづらい 外来植物をどうにかしたい ピーク付近では眺めが非常に良い ピーク付近を境に歩道の幅が変わる ハウノキがすてき スキー場内は急で歩きにくい スキー場側からの入口がわかりづらい	
D班	利用方針	①	②～③	②～③
	整備	トイレトペーパーの設置 定期的な道の整備	今よりもっと簡易的なロープ柵 利用に関しての注意書き	定期的に最小限の草刈り 看板の設置 看板に自己責任での利用を書く
	対策	監視員間の調整 車両は一方通行などの対策	利用時間の制限 利用期間の制限 段階的に整備のレベルを下げる 行ける人だけ利用	PRはしない 人数の制限が必要 現状を知っている人だけ利用
現状	ウスユキ群生地のロープが頼りない 車のすれ違いで植生が悪化している トイレの水、紙が無い 入口に駐車スペースが欲しい	草が覆い足もとが見えない 悪天候時には足元が汚れる 通り抜けできるかわからない 登り口が滑りやすい 杭がずれている 険しい	通り抜けできるかわからない 外来植物が多い 礼文滝に行くのに便利 ツアーなど団体が利用していない 過剰利用はピーク付近の植生に悪影響がでそう 険しい	
E班	利用方針	①	正しい利用	②
	整備	駐車場をつくる シャトルバスの運行 車両は一方通行 群生地までの道を整備	掴んで歩ける程度の柵にする 急坂は階段にする 強風・足元注意の看板 簡易的なロープ柵にする 自然のままの道が良い	車止めの柵 上級者向けをPR 入口にロープを張り利用者をけん制 車を制限するロープ ピークまで登れるようにする
	対策	車両の時間帯規制 観光シーズンは車両禁止 群生地の利用制限	人数の制限が必要	コース名の変更 悪天候時利用制限 秘密の道としてPRしない
現状	タクシーやレンタカー、中型バスも通行して 山菜採りで地元が車で入る 歩く人は車の通行が不快に感じる 車両通行止めになるとウスユキ群生地へ 行きにくい人がいる 群生地付近ではキャンピングカーで宿泊	ロープ柵があるので入りやすい 柵が傷んでいる 滑りやすいので柵を掴みながら歩いてしまう スニーカーでは滑って歩きにくい	団体が通行するとグランド利用者が困りそう スニーカーでは歩きにくい PRの程度で管理方法が異なる ピーク付近は霧の際道がわかりにくいのでロー プがある こすの名前を変えたほうが良いのでは 歩道に生える希少植物を保護した方がよい 作業道として使っている 観光化してない点が良い 花が少ない 森を通るのが特徴 景色が良い	
F班	利用方針	①	②	②～③
	整備		石が流れないように最低限の整備をする 道が滑る、装備についての注意書きの看板 掴まって歩ける程度の柵にする 現地の石等での整備が必要	ピーク付近の道をもっと下方に付け替える 悪天候時は利用禁止 ピーク付近はロープ外への立ち入りを禁止
	対策	車は時間制限する 島外の方は徒歩での利用のみ 車両は利用期間をつくる 障害者向けに車両は許可制にする 入口に駐車場を作る 歩行者優先にする	10人以下のグループの利用にする	もったいい名前をつける
現状	ウスユキ群生地まで徒歩だと時間がかかる。 車乗入可能な場所を作って欲しい 車が入って欲しくない 茶畑の様な植林地の解説板が欲しい 景色が見えない 道幅が広く、勾配も緩やかで良い ゆっくり花を見ながら歩くには良い	島民としてなぜ名前が付けられているかわ からない 滑りやすく雨の後など危険と感じた 過剰な整備をすると面白くなるが、危険 なところは整備すべき 柵が老朽化して危ない。整備しないのなら閉 鎖するのも良いのでは 花がきれい 急で滑りやすい場所がある	手作りの看板でだけ紹介しているのが神秘的で 良い 花が少ない 名前が良くない このコースを知らなかった 花が少ないので団体向けのコースでは無い ピーク付近では少し離れた場所に花があるので 植生への入り込みが心配 ピークの山頂へ登りたくなる。ロープを越えて行く 人がいると思う 観光コースとしてPRすると植生が荒れる心配が ピーク付近から森の中への変化が良い スキー場には外来植物が多いが景色が良かつ	

---

凡例:①施設や整備などを充実させてより多くの人に利用してもらう ②今までと同じ程度の利用を考え、整備等は順次おこなう ③歩道の状況により、人数、装備を設け過剰な利用を避ける

全体
風雨の強い際に避けられる施設が必要 香深からの周遊コースとして利用しやす
正しい利用
装備不足の人の利用規制 悪天候の際に通行規制
上・中・初級など散策レベルが書かれた コースマップの有料配布
子供には礼文林道よりもピークコースの ほうが歩きやすい
管理体制や利用方針がはっきりしてい 周回コースとして重宝
既存の柵や道を整備
利用者の装備や天候状況などによる利 用制限する
周回コースとして貴重
周遊コースとして良い

